View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by UTokyo Repository

博士論文（要約）

中国語の直示移動動詞の研究
—文法化した“来”、“去”の意味と統語的特徴—

相原まり子

日本語の「来る」、「行く」をはじめとする直示移動動詞は、通言語的にさまざまな機能語に文法化していることが知られている。現代中国語には、“来(lái)”、“去（qù)”という直示移動動詞があり、“来”は話し手のいる場所への移動を表し（「来る」に相当)、“去”は、話し手のいる場所から別の場所への移動を表す（「行く」に相当)。中国語の“来”、“去”にも他の言語の直示移動動詞と同様に、複数の方向への文法化が見られる。本論文で取り上げるのは、文法化した“来”、“去”のうち、次の（1）から（4）のような、動詞句の直前に現れる“来”、“去”である。

(1) 那好，你先休息，我 **来** 做 饭。

1SG LAI 作る 食事

（じゃ、いいよ、あなた先に休んで、私がご飯を作るから。）

(2) 结婚一个月妈妈就跟我说了，你现在独立了，应该承担赡养 老人的义务，

你 **去** 考虑 一下 每 个 月 给 我 多少 钱。

2SG QU 考える 少し 毎 CL 月 与える 1SG どのぐらい 金

（結婚して一ヶ月、母が私に言った。あなたはもう独立したんだ、老いた親を扶養する義務を負うべきだよ、私に毎月いくらくれるかちょっと考えてよ。）

(3) 在这次税制改革中，我们 用 实行 消费税 的 办法 **来** 进行 特殊 调节。

1PL 使う 実行する 消費税 STP 方法 LAI 行う 特殊 調整

（今回の税制改革において、我々は消費税を実施するという方法で特別調整を行う。）

(4) 近十五年来，我 国 各 族 人民 按照 这 个 理论 **去** 实践，

1SG 国 各 民族 人民 従ってこれ CL 理論 QU 実践する

已经取得 了举世瞩目的伟大成就。

（ここ十五年、我が国の各民族の人民はこの理論にしたがって実践し、既に、全世界の注目を浴びるような大きな成果を成し遂げている。）

本論文では、(1)から(4)のような“来”、“去”の意味と統語的特徴を明らかにし、これらの“来”、“去”を中国語文法体系のどこに位置づけるのが適当かという問題を論じた。さらに、共時的な分析を通して、これらの“来”、“去”が辿ってきた文法化の道筋を推定した。また、(1)から（4）の“来”、“去”を相互に比較し、相違点と共通点を明らかにした。最後に、通言語的な視点から“来”、“去”の文法化を眺め、他言語の直示移動動詞の文法化と類似、共通

している点と特殊な点を指摘した。以下では、上記の例（1）（2）のような前に動作者名詞句が現れる“来”、“去”をそれぞれ“来 f1”、“去 f1”と呼び、(3)（4）のような前に動詞句や前置詞句などが現れる“来”、“去”をそれぞれ“来 f2”、“去 f2”と呼ぶ。また、動作者名詞句を NPa と表記する。

本論文は 5 章から成る。第 1 章では、研究の目的、考察対象、分析に用いるデータ、本論文の構成について述べた。第 2 章以降の概要は以下の通りである。

第 2 章の概要

第 2 章では、例（1）のような、後ろに動詞句（＝VP）を伴い、前に動作者名詞句（＝NPa）が現れる文法化した“来”（＝“来 f1”）を取り上げた。最初に意味と統語的特徴を考察し、“来 f1”が次のような意味を表すということを明らかにした（〔話者領域【場】〕は〔話者が視点を置く場〕を指す)。

> **来 f1 :** 後ろの VP が〔話者領域【場】〕において誰かが行う必要のある行為であるということを前提として表示し、NPa の指示対象が〔話者領域【場】〕に心理的に移動してその行為を実現させることを、話し手またはそれに準じる人物が希求していることを表す。

“来 f1”の意味を論じる過程では、先行研究で指摘されてきた「積極性の含意」、「即時性・現場性の含意」、「聞き手との距離を縮める効果」が生じる条件やそのメカニズムが上記の意味からうまく説明できることを示した。さらに、認識的モダリティ動詞を前に入れられない、諾否疑問文を作りにくいなどの複数の統語的特徴および“来 f1”が従属節に現れる条件が“来 f1”のもつ希求義から合理的に説明できることを示し、主語である NPa が省略できず、後ろの VP の省略が可能であることが“来 f1”の情報構造表示機能から説明できることを示した。また、NPa が一人称の例が圧倒的に多いことには希求義も関わるが、それだけでは説明できないことを示し、“来 f1”が後ろの VP を「誰かがやるべき行為」として表示することも関っていることを指摘した。

次に、“来 f1”をどのカテゴリーに分類するのが適当かという問題について論じた。意味の面から考えると、“来 f1”は、必要性を表すという点で“得”“応該”“要”などの義務的モダリティ（deontic modality）用法と共通しているが、一般的な義務的モダリティ表現と“来 f1”の間には、次のような違いもある。

・“来 f1”は「誰かが VP の表す行為を行う必要がある」ということを表すものであるが、他

の義務的モダリティ表現は「NPa が VP の表す行為を行う必要がある」ことを表すものである。

・“来 f1”は「誰かが VP の表す行為を行う必要がある」という話し手の判断だけではなく、その判断を前提とした「NPa による VP の実現」に対する話し手の希求的態度も表すため、二重に話し手の心的態度を表していると言える。これに対して、他の義務的モダリティ表現にはそのような二重性はない。

・“来 f1”には、VP の必要性を〔話者領域【場】〕に定位する機能があるが、他の義務的モダリティ表現にはそのような機能はない。

統語的な面に注目すると、“来 f1”は、後ろに VP が生起するという点でモダリティ動詞やモダリティ副詞と共通しているが、次のような違いも見られる。

・一般的なモダリティ動詞は、直後に副詞を入れることができるが、“来 f1”の直後には副詞を入れることができない。

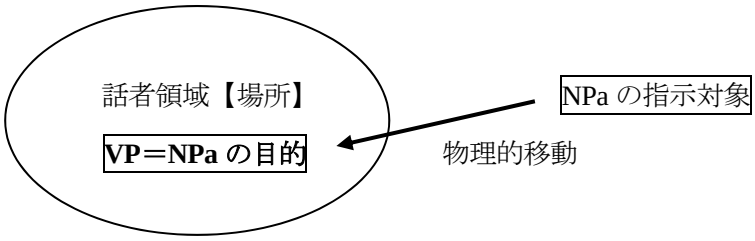
・モダリティ副詞は、モダリティ動詞と共起する際、通常、モダリティ動詞の前に置かれるが、“来 f1”とモダリティ動詞が共起する場合、“来 f1”はモダリティ動詞の後ろに用いられる。

また、“来 f1”は、モダリティ動詞の後ろに用いることができる点は一般的な動詞と共通しているが、普通の動詞には見られない統語的制約も多い。“来 f1”の統語的特徴と“来 f1”が動詞の“来”から生まれたものであるという推定に基づけば、“来 f1”を動詞というカテゴリーから脱範疇化しつつある段階の非典型的な動詞と見なす、という見方が妥当だと思われる。

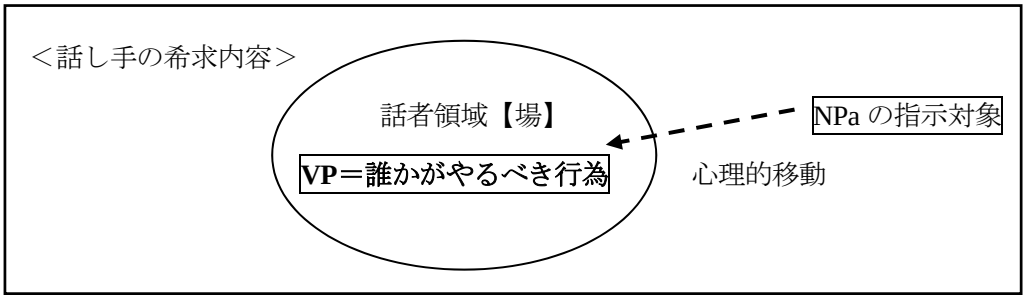
第 2 章では、さらに、後ろに VP を伴う物理的移動を表す“来”から“来 f1”への文法化の道筋を推定し、次のような変化のプロセスが想定できるということを述べた。

［NPa+来+VP］という形式には元々「NPa が VP を行うことを目的として〔話者領域【場所】〕へ物理的に移動する」という解釈が結びついていたが、話し手が〔話者領域【場】〕において誰かが VP の表す行為を行うことが必要であると判断し、NPa を〔話者領域【場】〕に投入してその行為を実現させようとしている文脈（＝文脈 P）においても［NPa+来+VP］が用いられるようになる。それによって、従来の解釈に加え、文脈 P でのそのような話し手の心的態度もこの形式と結びつく。その後、物理的移動の解釈ができない文脈でも用いられるようになり、新解釈が固定化する。

文法化前の［NPa+来+VP］に結びつく解釈と文脈 P で誘発される［NPa+来+VP］に対する新解釈は、図示するとそれぞれ次のようになる。楕円は〔話者領域〕を表す。



文法化前の解釈



文脈 P において引き起こされる新解釈

最後に、代動詞的用法の“来”と呼ばれるものと“来 f1”の関係についても考察を加え、代動詞的用法の“来”には、“来 f1”を経由したことが確実なものもあれば、経路がはっきりしないものもあることを指摘した。

第 3 章の概要

第 3 章では、先に挙げた例（2）のような、後ろに VP を伴い、前に NPa が現れる文法化した“去”（＝“去 f1”）を取り上げた。まず、意味および統語的特徴を考察し、“去 f1”が次のような意味を表すということを指摘した（〔他者領域【場】〕は〔話者が視点を置く場〕の外を指す）。

去 f1：「〔話者領域【場】〕内の NPa が、後ろの VP の表す行為を行うことを意図して〔他者領域【場】〕に心理的に移動し、その行為を実現する」ということを非現実事態として表す。

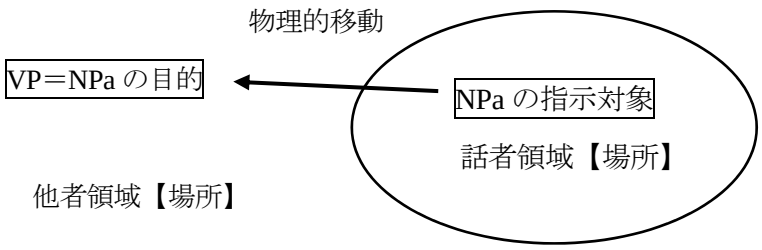
そして、“去 f1”の後ろの動詞に完了を表す接辞“了”を付けにくいこと、“去 f1”の前に“没(有)”が無いと後ろの動詞に経験を表す“过”を付加しにくいこと、“的”構文にすると不自然になることなどが、“去 f1”のもつ非現実の意味から説明できるということを示した。

さらに、“来 f1”との比較も行い、“来 f1”と“去 f1”の非対称性を明らかにした。“去 f1”は、非現実事態に言及するのに用いられる点や心理的移動の意味をもつ点では“来 f1”と共通しているが、後ろの VP を「誰かがやるべき行為」として表示しているわけではなく、話し手の希求を表す機能も持たない。また、“来 f1”は後ろの VP の必要性を前提内要素として表示し、主語である NPa を脱主題化するが、“去 f1”にはそのような情報構造表示機能はない。

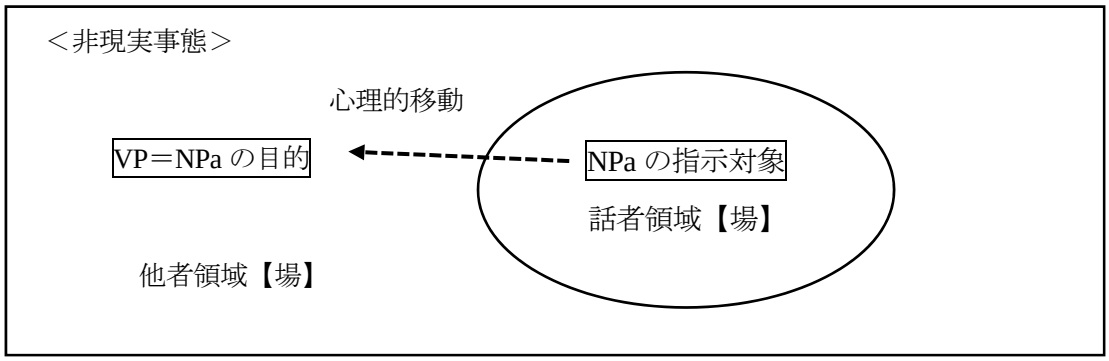
次に、“去 f1”をどのカテゴリーに入れるのが適当かという問題を論じた。意味の面に注目すると、“去 f1”は、NPa の意志、意図を表す点において、力動的モダリティ（dynamic modality）表現と共通していると言える。しかし、“要”のような意志を表す力動的モダリティ表現とは異なり、「意図、意志がある」ということのみならず、「意図して行う」という動態的な意味も表す。さらに、“去 f1”は、一般的なモダリティ表現と異なり、後ろの VP を〔他者領域【場】〕に定位する機能も併せもつ。統語的な面から見ると、後ろに VP を伴う点はモダリティ動詞やモダリティ副詞と共通しているが、“去 f1”は、一般的なモダリティ動詞と違い、後ろの VP を省略できず、直後に副詞を入れることができない。“去 f1”とモダリティ副詞を比べてみると、モダリティ副詞はモダリティ動詞の前に置かれるが、“去 f1”はモダリティ動詞の後ろに置かれるという違いがある。“去 f1”は一般的な動詞には見られない特徴も持ち合わせているが、普通の動詞と同様に、モダリティ動詞の後ろに用いることができ、前に否定詞の“不”や“没”を入れることもできる。これらのことと“去 f1”が動詞の“去”から生まれたものであるという推定に基づけば、“去 f1”を、動詞から脱範疇化しつつある非典型的な動詞と見なすことが適当だと思われる。動詞から脱範疇化しつつあるという点では“来 f1”と同じであるが、“来 f1”と比べると、“去 f1”は普通の動詞がもつ統語的特徴を十分保持しており、脱範疇化の度合いは低いと言える。

第 3 章では、後ろに VP を伴う物理的移動を表す“去”から“去 f1”への文法化の道筋についても考察を加えた。物理的移動を表す“去”を含む［NPa+去+VP］は、通常、「NPa が VP を実現することを目的として〔他者領域【場所】〕に物理的に移動する」と解釈され、VP は NPa が目指す対象、求める対象であるが、この点は［NPa+去 f1+VP］にも受け継がれており、後ろの VP はやはり NPa が目指す対象、求める対象である。物理的移動を表す“去”を含む［NPa+去+VP］と［NPa+去 f1+VP］の主な違いは、前者が場所に注目し、後者が場面、状況に注目し

た表現であるという点である。このようなことから、もともとは場所に注目する時に使われていた［NPa+去+VP］が、非現実事態の伝達において、場所ではなく、場面や状況に注目して使われるようになり（このような文脈を文脈 M と呼ぶ)、その時の話し手の認識がこの形式に結びついたと考えられる。文法化前の［NPa+去+VP］に対する解釈、文脈 M において引き起こされる［NPa+去+VP］に対する新解釈を図示すると、それぞれ以下の図のようになる。



文法化前の解釈



文脈 M において引き起こされる新解釈

第 3 章では、最後に、“去 f1”と“来 f1”の非対称性が何に起因するのかという問題を考察し、考えられる要因として（i）話者が〔他者領域【場】〕の事態を解決しようとする頻度が〔話者領域【場】〕のそれよりも低い、(ii)〔他者領域【場】〕の事態解決に関する提案の頻度が〔話者領域【場】〕のそれよりも低い、という二つを挙げた。

第 4 章の概要

第 4 章では、先に挙げた例（3）（4）のような、動詞句や前置詞句などが前に現れる文法化し

た“来”“去”（＝“来 f2”“去 f2”）を取り上げ、最初に、“来 f2”“去 f2”が、それぞれ、以下のような意味を表すということを示した。

来 f2：NPa の指示対象が、後ろの VP の表す行為を〔話者領域【場】〕で行うことを目的とし、前に現れる成分の表すやり方で実現することを表す。

去 f2：NPa の指示対象が、後ろの VP の表す行為を〔他者領域【場】〕で行うことを目的とし、前に現れる成分の表すやり方で実現することを表す。

“来 f2”と“去 f2”を入れ替えても意味の差異がはっきりしない場合と入れ替えられない場合があるが、このことは〔話者領域【場】〕と発話の場の関係からうまく説明できる。“来 f2”“去 f2”の前には、前置詞句や動詞句のほか、連用修飾を担う代詞、副詞、形容詞、時間詞、方位詞も現れ得るが、前の成分が連用代詞や副詞の文は、現実事態の叙述に使いにくく、前の成分が形容詞、時間詞、方位詞である文は非現実事態の叙述にしか用いられない。

次に、“来 f2”“去 f2”をどのカテゴリーに入れるのが適切かという問題を論じた。等位接続テストの結果は［来 f2/去 f2+VP］が一つの構成素（constituent）を成していることを示しており、“来 f2”“去 f2”を後置詞と見なすという先行研究の分析には問題がある。“来 f2”、“去 f2”の現れる位置は一般的な動詞と共通しており、動詞の一つと見なすことも可能であるが、両者は、後ろの VP を NPa の目的として特定の領域に定位し、前の成分をその目的の「実現のさせ方」として表示する、という共通の機能をもっており、互いに対立する要素である。したがって、動詞に分類するとしても、“来 f2”と“去 f2”が一つのセットとして、動詞の下位カテゴリーを形成していると見なすのが適当である。

第 4 章では、“来 f2”“去 f2”の文法化の経路についても考察した。先行研究では、“来 f2”“去 f2”が、連動文の一つ目の VP の位置に生起する使役移動表現［動詞（+非直示的方向補語）+移動物 NP+来/去］に含まれる方向補語の“来”“去”から生まれたと推定されている。本論文では、その仮説を支持した上で、方向補語の“来”“去”から“来 f2”“去 f2”への変化の道筋について以下のような新たな仮説を提示した（以下では、連動文の一つ目の動詞句を VP1、二つ目の動詞句を VP2、非直示的方向補語を非直示と略記する）。

> 話し手が「〔話者領域【場】〕/〔他者領域【場】〕での VP2 の実現」を NPa の目的と捉え、VP1 を実現のさせ方と捉えている文脈において、［NPa+VP1（使役移動関連動詞（+非直示）+移動物 NP+来/去）+VP2］を用いることで、そのような話し手の認識がこの形式に結びつく。その後、再分析が起こり、元々は VP1 の一部であった“来”

“去”が後ろの部分と一体化して［来/去+VP2］が一つの句となり、VP1 から“来”“去”を除いた部分、即ち［使役移動関連動詞（+非直示）+移動物 NP］が一つの句となる。［使役移動関連動詞（+非直示）+移動物 NP］が「実現のさせ方」という情報を担う一つの句になったことにより、類推による一般化が起こり、“来”“去”の前の位置に［使役移動関連動詞（+非直示）+移動物 NP］以外の「実現のさせ方」を表す動詞句や前置詞句も生起するようになる。さらに、“来”“去”の前に入る成分が増加し、「実現のさせ方」を表す連用代詞、副詞、形容詞、時間詞、方位詞も入るようになる。

第 4 章では、さらに、“来 f2”と“来 f1”、“去 f2”と去 f1”をそれぞれ比較し、以下のような共通点と相違点があることを指摘した。

➢ “来 f1”と“来 f2”の共通点

“来 f1”の後ろの VP は誰かが行う必要のある行為であり、“来 f2”の後ろの VP は NPa の目的、すなわち、NPa が必要としている行為である。そして、“来 f1”の場合も“来 f2”の場合も、VP の表す行為は〔話者領域【場】〕で実現されることが必要とされている。したがって、“来 f1”と“来 f2”は、後ろの VP を「〔話者領域【場】〕での実現が必要とされている行為」として表示する点で共通していると言える。“来 f1”と“来 f2”は、前の成分が「必要とされている行為をどうやって実現させるか」という情報を担っている点も同じである。また、前の成分と後ろの VP が必須要素である点（後ろの VP は現れないこともあるが、その場合でも文脈によって必ず補完される）、前の成分が省略できない点、後ろの動詞に“了”“过”を付けにくい点も共通している。

➢ “来 f1”と“来 f2”の相違点

“来 f1”は「誰かが VP の表す行為を〔話者領域【場】〕で行う必要がある」ことを表し、“来 f2”は「NPa が VP の表す行為を〔話者領域【場】〕で行うことを NPa 自身が求める」ことを表す。“来 f1”は VP の表す行為の必要性を前提として表示するが、“来 f2”にはそのような情報構造表示機能はない。また、“来 f1”には、話し手の希求を表す機能があるが、“来 f2”にはそのような機能はない。

➢ “去 f1”と“去 f2”の共通点

“去 f1”と“去 f2”は、「NPa が〔他者領域【場】〕で VP の表す行為を行うことを NPa 自身が求めている」ということを表す点で共通している。後ろの動詞に“了”を付けにくく、後ろの

VP を省略できないという点も同じである。

➢ “去 f1”と“去 f2”の相違点

“去 f1”は、「NPa が VP を実現する」という事態が非現実事態であることを表すが、“去 f2”は現実事態の叙述にも用いられる。“去 f1”の場合、前に否定詞の“没（有）”があれば後ろの動詞に“过”を付けることができるが、“去 f2”の場合、“没（有）”があっても“过”を付けにくい。また、“去 f1”の前の NPa は省略可能だが、“去 f2”の前の「実現のさせ方」を担う成分は必ず明示しなくてはならない。

第 4 章では、最後に、“来 f1”、“去 f1”、“来 f2”、“去 f2”の文法化の度合いについて考察を加え、いずれも、意味が抽象化し、拘束的な形式になっているが、“来 f1”“去 f1”は、“来 f2”“去 f2”と異なり、互いに対立する要素ではなく、一つの閉じたクラスを成しているとは見なせない、ということを述べた。

第 5 章の概要

第 5 章では、先行研究で報告されている様々な言語の直示移動動詞の文法化と“来”“去”の文法化を比較した。その結果、“来”“去”の文法化と他言語の直示移動動詞の文法化の間に複数の類似点、共通点があることが明らかになったが、一方で、“来 f1”の特殊な面も見つかった。“来 f1”が獲得している情報構造表示機能（後ろの VP が表す行為の必要性を前提内要素として表示し、主語（NPa）を脱主題化する）および“来 f1”が表す話し手の心的態度の二重性（「誰かが後ろの VP の表す行為を行う必要がある」、「NPa による VP の実現を希求する」）は、他の言語の研究では報告されておらず、このような変化は特殊である可能性がある。

最後に、本研究の成果の中で特に重要だと思われる点として、“来 f1”と“去 f1”は意味的に非対称であり、統語的特徴にも大きな違いが見られるということが明らかになったこと、“来 f1”、“去 f1”が典型的なモダリティ表現とどのような面において異なっているのかを明確にできたこと、“来 f1”と“来 f2”の共通点、相違点が浮き彫りとなったこと、通言語的な考察により、“来 f1”の特殊な面が浮かび上がったことなどを挙げた。